

ばれ」

とある佛頂は、鹿島郡白鳥村札に寛永十九年に生れ、二年後の正保元年に芭蕉が生れている。佛頂は三十一才で勅願寺の古刹鹿島町下生の根本寺二十一世の住職となつた偉才で、當時寺は鹿島神宮の傘下であり、寺領の件で大宮司家と争い、幕府に提訴して、九年闘争後勝訴した。

其の間に滞在した、江戸深川の臨川庵が、芭蕉庵に近い上に、當時の芭蕉は仕官懸命と佛籬祖室の扉に入らんとしう、二元相刻の惱みを解決するため、佛頂會下として修業したが、その交情はまことに濃かであつたことは、次の事項により立証出来る。

1 琵琶園隨筆の芭蕉の書翰

2 蘭溪の「俳諧叢語艸稿」の門慧の問書にある芭蕉の句の上五文字を佛頂の添削した。

3 路通の「俳諧勸進帳」にある佛頂の句

4 佛頂の僕の六祖五平の紹介で、芭蕉庵の焼失後甲斐に芭蕉の疎開した。

5 鹿島の月見、佛頂の隠居した根本寺に貞享四年中秋、旅してものした「鹿島紀行」の内に

月早し梢は雨をもちながら 芭蕉

6 「奥の細道」に佛頂山居の跡を訪ねてよんだ

木啄も庵は破らず夏木立

7 佛頂より開眼悟道の印可とした、

袈裟と如意を授與された。

以上により二人は、師弟というより肝胆相照した親睦の友朋であつたことが知れる。

ひいて芭蕉の俳諧に及ぼした禪の影響の必然性の機縁が誘導されるのである。

(鹿島高等学校)

## 日本文学研究史に於ける

### 時代区劃の問題

軍司敏郎

日本文学の研究史を総合的に論述した書で、管見に入つたものは、野村八良博士の「國文学研究史」国語と国文学特輯「日本文学研究史」(上世篇、中近世篇)、藤田徳太郎の「日本文学研究史概説」(雜誌古典研究昭和十三年春季臨時増刊號)等である。私はこれら先覚の所説から一步を進めて、日本文學の研究史を次の四期に區劃したい。

◇ 第一期、歌学時代(奈良後期—平安末期)歌学中心の時代である。この期の歌學書の發展を考察すると、和歌式↓逸話集↓考證書↓難語解釋書↓歌語辞典↓特定歌集の註釋書と發展して、次第に註釋学が成立する過程が知られる。

◇ 第二期、古典学形成時代(鎌倉初期—江戸初期)、從來歌

學の從屬に過ぎなかつた日本文學的研究が歌學を中核としつつ獨立の傾向を見せて來た時代である。この期の大立物は藤原定家であるが、室町期に入ると共に、傳統化秘伝化神秘化形骸化されて、次第に生氣なき學問となり終つた。

◇ 第三期、國學時代（元祿期—明治二十年頃）、古代純日本思想への復歸と文獻學的方法の樹立とを特色とする國學者によつて日本文學の研究が行われた時代である。契沖によつて方法論が建設され、荷田春滿により學の目標が定められた。本居宣長が本期の中心人物である。

◇ 第四期、國文學時代（明治二十年頃—現今）、東京大學に國文學科が設けられ、芳賀矢一博士等によつてドイツ文獻學が移入された頃から現今までを國文學時代と名づける。芳賀博士によつて建設された日本文獻學は、大正末年に至ると共に、書誌學的傾向を強めつつ今日に至つてゐるが、この學派の他に、日本文藝學派、歴史社會學派、民俗學派等が據頭して各流亂立の体をなしてゐる。



（県立水戸商業

高等學校教諭）

## 文化文政期における

### 郷土俳人幻窓湖中の業績

有馬 徳

幻窓湖中は水戸藩工で、本名は岡野平五郎又は庄八、号は四壁堂とも稱した。彼の業績は芭蕉の研究者として、点者として、又俳人としての三つが考えられる。芭蕉の研究としては、研究著述が主で、俳諧一葉集・芭蕉翁畧伝・蔦羽集等がある。一葉集は文政十二年佛今律師と共著したもので、寛文より元祿年間に至る芭蕉の發句・附句・文・消息・句合・遺語等を集めた一代集である。畧傳は弘化二年門人西巷野巢が校合し刊行したもので、芭蕉の閑壓の外に發句を年代順に配したものである。蔦羽集は文政十年に謄写したもので、芭蕉の連句を猿蓑・深川・韻塞・炭俵・續猿蓑・別坐鋪等の諸集の中から、抜抄し、評釋したものである。以上の著述は單なる著述のため、著述ではなく、正風復興のためであり、芭蕉の精神を活かすことに目的があつた。

次に点者としての彼は、當時の他の点者の如き生活のための職業的点者ではなく、正風を普及する目的を以て、門下の指導に當つた純粹の点者であつた。門下に示した家傳書は